

「漫画」と「哲学」の関係

(永井均『マンガは哲学する』より)

- 「二十世紀後半の日本のマンガは、世界史的に見て、新しい芸術表現を生み出している……。世の中の内部で公認された問題とはちがう、世の中の成り立ちそのものにひそむ問題が、きわめて鋭い感覚で提起されている」
- 「私がマンガに求めるもの、それはある種の狂気である。現実を支配している約束事をまったく無視しているのに、内部にリアリティと整合性を保ち、それゆえこの現実を包み込んで、むしろその狂気こそがほんとうの現実ではないかと思わせる力があるような大狂気。」

「ミノタウロスの皿」について

- 藤子・F・不二雄の初の大人向け(異色短編)読切漫画。1969年に発表。
- 「自分にもこんなものが書けるのか、という新しいオモチャを手に入れたような喜びがありました。」→以後、シュールでブラックな短編を70年代半ばにかけて50編ほど書く。
- 「藤子・F・不二雄は、現実をつねにありえたかもしれない他の可能性との対比の中で見ている。われわれが信じて疑わないこの現実が、彼の目には、そうでなくてもよかったひとつの偶然的なあり方のように見えているのである。」(永井)

あらすじ①

- 主人公の青年がイノックス星という惑星に不時着する
- そこは地球でいう牛と人間が逆転した世界
＝「ズン類」という牛に似た動物が支配し、「ウス」という人間に似た動物がその家畜
- 彼は美しいウスの娘ミノアに恋をするが、彼女は栄誉ある「ミノタウロスの皿」に選ばれており、まもなくズン類に食べられる運命だった

あらすじ②

- 「牛が人間を食うなんて、そんなベラボーな！」と憤る青年に対してミノアは言う。「あたしたちの死は、そんなむだなもんじゃないわ。おおぜいの人を舌をたのませるのよ。とくべつおいしかったら、永久に大祭史に名がのこるのよ。」
- 青年はこんな残虐な風習はやめさせようと、有力者を説いて回るが、ことごとく失敗→「彼等には相手の立場で物を考える能力がまったく欠けている。」と落胆

呉智英「名著の衝撃」での評

(中日新聞、2014年1月16日夕刊)

- 「人間と家畜をただ入れ替えただけでも、ものごとの見え方、価値観ががらりと変わる。それが藤子F特有のユーモラスな筆致で描かれると、かえって強烈な諷刺となる。家畜の美少女が大皿の上に乗るシーンは、藤子Fの作品では珍しく全裸だが、児童マンガの描線のため全然エロチックではなく、しかし、物語の異常な設定の中で一回りしたエロチシズムさえ感じさせる。」

考えてみたいこと

- この作品のなにが私たちを惹きつけるのか？
- 私たちの立場からして「理解に苦しむ」行ないを、相手が喜んで行なおうとしている場合、私たちはどう相手を説得したらよいのか？その説得を正当化するものとはなにか？
- 肉食という習慣は、はたして正しいのか？もしそれが許される営みなのだとしたら、その理由とはどういうものか？